

## 2015 年度の主な事業報告

社会福祉法人 バプテスト心身障害児（者）を守る会  
理事長 山田 雄次

### 社会福祉事業

2015 年度における最たる事業として 2012 年度後半から 2 年半の時をかけ、園を挙げ（会議を重ね）て取り組みが進められてきた「在宅支援センター」の開設をあげなければならないと思います。

5 月 29 日（金）に久山療育園と設計管理者、建築工事請負業者各代表立ち会いのもとで完成した建物（「在宅支援センター」）の引き渡しが行われ、それから 1 ヶ月をかけ入居者の受け入れをはじめとする開設のための内部での諸準備が進められ、7 月 1 日（水）「在宅支援棟」（本体事業）とグループホーム（共同生活支援事業）「重症者ホームひさやま」（新規事業）が同時に開所しました。

「在宅支援棟」は通所事業、短期入所事業、相談支援事業、訪問支援事業等々の在宅支援サービスを包括する在宅支援強化のための拠点として位置付けられ、「重症者ホームひさやま」は障害の重度化や両親の高齢化等により、家庭での介護が難しくなり、限界的状況の中で求められている在宅支援のニーズに応えるものとして開設された定員 10 名の重症児者のためのグループホーム（共同生活支援事業）で、2 つは共にこれからの久山療育園の在宅支援活動の軸となるものとして期待されている働きです。

今日重症児者福祉にかかわる者の間では周知のこととなっていますが、2015 年度多くの注目が寄せられる中、福岡県で行われた重症児者の実態調査の報告により在宅重症児者とその家族が非常に厳しい状況の中に置かれているという実態が浮き彫りとなり、在宅の重症児者支援の施策と新しい受け皿づくりが喫緊の課題となっていることが明らかになりました。今日の障害者福祉は、脱施設、地域移行の流れにあり、新しい入所施設の開設と増床は行われない上に、今ある重症児者施設におけるベッド数も将来削減の恐れがあると言われており、障害程度区分の低い重症児者の施設入所が難しくなっていくということが心配されています。久山療育園はそうした状況に鑑み医療的ケアの必要度の低い重症者（障害程度区分 5～6、重度障害児スコア 3 点以下）に対する新しい受け皿として年間 1,000 万円を越える赤字覚悟で「重症者ホームひさやま」開設の決断を行いました。

入居については募集の開始と同時に多くの引き合いがあり、早期に満床となったのは、在宅の重症児者（家庭）から寄せられているホームに対する関心と入居のニーズの高さを表しているものと思います。「重症者ホームひさやま」の開始にあたっては慎重を期し、渡辺浩行診療部長を兼務で施設長として立て、サービス管理責任者 1 名の他、経験を積んだ 10 名の生活指導員を配置し、万全を期して介護の職務にあたりました。「重症者ホーム」が本体のセンターに隣接していることで、緊急時にはセンターから医療支援を受けることが出来るという立地条件にも恵まれ（意図して隣接地にホームを建てたのですが）、ホームでの「健康」「生活全般」「その他」のことについて満足（概ね「満足」を含め）しているという入居者（保護者）からの評価（アンケート調査）を受け、初年度順調な経過をたどっていることを喜びました。

将来入居が必要となった在宅重症児者に対する受け皿不足という事態を生じさせないように、又親なきあと残される子どものことで親が悩むことなく、安んじて暮らしてゆくことが出来る福祉社会づくりを目ざし、この度の取り組みが新しいテストケースとなるという意味を込め「重症者ホームひさやま」の運営を堅持し、事業の成功を期してゆかねばと思います。

在宅支援の新しい取り組みとしての「重症者ホームひさやま」の働きも含め、在宅支援の強化のための拠点としての「在宅支援棟」を軸とした「在宅支援センター」の働きが「重症者医療療育センター」としての久山療育園の事業の一層の拡充に寄与するものとなることを切望する次第です。